商店街イベントへの参画による「つながる地域博物館」の試み

横須賀市自然・人文博物館　主任学芸員　内 舩 俊 樹

神奈川県横須賀市にある同市自然・人文博物館は 2018 年で開館 64 年目を迎えた。本稿は、当館の主に自然部門の歴史を地域や市民との関係に重点を置いて紹介した後、「第三世代」にあたる現在の若手学芸員によって実践を開始した地域に対する取組みを紹介するものである [1)]。

1．郷土博物館としての横須賀市博物館

当博物館は 1954 年に同市久里浜に「横須賀市博物館」として開館した。1970 年に新館として同市深田台に自然部門が移転、1984 年に人文部門が同地に移転したことに伴い、名称が「横須賀市自然・人文博物館」に改称され、現在に至る。当館前史として特筆すべきは、1949 年に市内在住の郷土研究家によって発足した「三浦半島研究会」である。市史編纂事業に伴って設置された横須賀市郷土文化研究室をきっかけとはしているものの、博物館が根ざす「郷土」を市域にとどまらず「三浦半島地域」と定め、自然風土や歴史文化に関する資料を収集・研究した。この活動は開館後も続き、博物館展示・講演会・野外学習ならびに刊行物を通じて、市民への普及が行われた。

開館当年の 1954 年に行った座談会 [2)] の記録によると、「郷土博物館」を自負する当館がどのように「郷土」を扱ったらよいかという話題について、「郷土にリンゴが出来ないからと云ってリンゴを教えないことはよくない」、「陳列は最初郷土のものでやり、その関連において他の土地のものを集める」などの意見や、当館が目指す姿としてアルトナ博物館（ドイツ）の設立経緯 [3)] が紹介された。座談会の翌年には「夏休み採集展」が開催され、小中学生による採集標本を一堂に展示して審査・講評を行うとともに、当館への標本寄贈の機会とした（第 1 図）。

第 1 図　第 1 回夏休み採集展（1955 年）

この「横須賀市博物館」時代を彩った三人の自然系学芸員には、収集資料の展示や研究成果の講演を通じ

1）本稿の前半部は、内舩俊樹・山本 薫 2017「今また郷土とつながる～地域を感じる新たなステップ～」社会教育推進全国協議会編『日本の社会教育実践 2017 第 57 回社会教育研究全国集会資料集』, pp. 154-156.（2017 年 8 月 26 日）を改変したものである。

2）羽根田弥太 1956「畑井・新谷両先生をかこんでの座談会」横須賀市博物館雑報 2, pp.2-5.

3）小学校教師が日常的に路傍の岩石や植物を採集・同定して小学校に陳列していたところ、児童もそれに倣って収集の輪が広がり、ついには保護者も参加する大きな運動となり、市役所が収蔵庫として新設した建屋が博物館の基礎になった事例。

て市民の学びを深めた羽根田弥太、生息・生育場所での生物の生態を市民とともに観察しそれらの保全に努めた柴田敏隆、市民とともにフィールドを巡り植物誌編纂に向けた標本資料を収集した大谷 茂がいた。彼ら「第一世代」の間には資料に対する考え方や市民との関わり方で違いが認められたものの、それぞれの学芸員の際立った個性が織りなす博物館活動は、1959 年開園の馬堀自然教育園や 1966 年開園の天神島臨海自然教育園のような博物館の研究と保全の拠点となるフィールド施設の設置や、1970 年の自然部門の移転にともなう新館の設置へとつながった。

2．地域博物館としての横須賀市自然・人文博物館

新館開館の翌 1971 年 3 月に発行された館報（当時は「雑報」）には、公立博物館としての当館が新たに掲げた「目標」が示された[4]。現在は当館の「使命」（第 2 図）として受継がれている 6 つの「目標」には、その第 4 項に「生涯学習の場と機会を提供する」が挙げられている。これについて羽根田[5]は、「博物館を中心として地域の人々が、研究会や趣味の会を行ったり、博物館側では研究団体を育成したり、講演会や音楽会、映画会を行ない、地域の人々に親しまれる博物館となる」としている。

○三浦半島の自然と人の歴史をわかりやすく展示する。
○資料を収集して分類・整理し、学術資料として活用するとともに永久に保管する。
○研究機関としての役割を担う。
○生涯学習の場と機会を提供する。
○学校教育に役立てる。
○自然と文化の遺産を保護する立場に立つ。

第 2 図　横須賀市自然・人文博物館の「使命」

当館によって育成された自然系の研究団体は、当初は 1959 年に設立の「横須賀植物会」（担当：大谷）や「三浦半島自然保護の会」（担当：柴田）のように、前出の「三浦半島研究会」の分科会から派生したものであった。自然部門移転以降は, 1977 年に設立の「三浦半島昆虫研究会」（担当：大場信義）、1989 年設立の「相模湾生物研究会」（担当：林 公義）、1995 年設立の「三浦半島活断層調査会」（担当：蟹江康光）のように、新任学芸員が関与して生まれた団体も加わった一方、担当が新任学芸員へ引き継がれた団体（「横須賀植物会」：1989 年以降の担当：大森雄治）もあった。

前述の新館開館ののち、人文部門の新館移転によって「自然・人文博物館」へと変容するまでの 14 年間に、自然部門の学芸員の顔ぶれは全て新しくなった。当館にとって「第二世代」となる学芸員は、開館当初に「郷土」と定めた三浦半島の自然史研究をいっそう推し進めただけでなく、羽根田のように研究・資料収集範囲を世界に広げたり（マダガスカル：蟹江、パラオ：林、インドネシア：大場、ヒマラヤ：大森）、柴田のように市民による地域の自然再生事業などを指導（河川環境再生：大場）したり、大谷のように研究団体による資料収集・整理の推進（魚類：林、植物：大森）を図ったりした。

ここまでをまとめると、郷土博物館としてスタートしたのち地域博物館としての使命を掲げ

4）羽根田弥太 1971「横須賀市博物館新館の完成」横須賀市博物館雑報 16, pp.1-6.
5）同前。

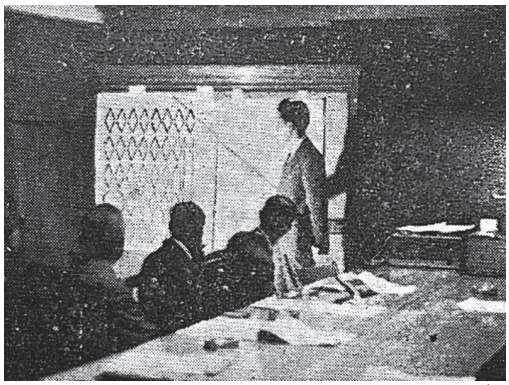
た当館が、世代交代を経ても変わることなく大切にした二つの姿勢を挙げることができる。一つは郷土についての資料を集め、国内外の資料や知見をもとに郷土の特徴を分析し、市民に分かりやすく伝える姿勢であり、もう一つは市民とフィールドに出て調査や資料収集、自然や文化財の保全・保存を行う姿勢である。

3．新しい学芸員から見た博物館と地域

筆者を含めおよそ 2000 年以降に採用された「第三世代」の学芸員は、前任学芸員たちが大切にしてきた地域と市民に対する二つの姿勢（前項参照）を受け継ぎ、それぞれの活動をスタートさせた。しかし、次に述べる課題や周辺との乖（かい）離もまた、実感しながら活動することとなった。

1）新しい学芸員が直面した課題

前述した自然部門の移転・新館開館（1971 年）後はもちろんのこと、同じ敷地に人文部門が新館移転することによって「自然・人文博物館」（1984 年）となって以降も、日常業務を行うオフィスは自然部門と人文部門で棟を分けたままであった上、学芸員の世代交代も重なり、両部門の学芸員の間に徐々に距離感が生まれていくこととなった。1976 年から館内の学芸員および研究員間の情報共有の機会として実施していた「博物館ゼミナール（学芸ゼミナール）」は 1991 年で終了しており、博物館実習の学生も 1993 年からは部門で分けて受入れを行うようになった。郷土に関するテーマなら何でも同じ場で発表できた「郷土研究発表会」（第 3 図）は 1959 年からスタートしたが、第 20 回以降、各部門で別日もしくは別会場で開催するようになり、第 35 回（1994 年）から自然部門は独立して「自然科学研究発表会」と名称を変えるに至った。学芸員間を隔てた「異分野の壁」は、一方では個々の学芸員の専門性の高さを裏返した結果とも取れるが、多様化していった地域の課題や利用者のニーズに対して地域博物館として総合的に応えるための力については、むしろ減衰した感が否めない。



第 3 図　第 1 回郷土研究発表会（1959 年）[6)]

かつての「三浦半島研究会」ならびにそこから派生したり新生したりして現在へと至る研究団体には、郷土の自然や歴史を探究する教員も多く参加していた。博物館とともに行う様々な地域研究は、博物館への知や資料の集積として結実するだけでなく、こうした教員によって学校教育の場で地域に還元される上でも効果は大きい。また、活動の中心が熱意のある教員に支えられ、その教え子もまた研究団体のメンバーとして活躍した例（三浦半島昆虫研究

6）横須賀市博物館雑報 6, p.12.

会）からは、地域の研究団体に教員が参加することの意義の深さを知ることができる。しかし、こうした研究団体では、徐々に教員のみならず働き世代を中心に新規加入が乏しくなり、時代とともに構成員が高齢化していった。

2）博物館を取り巻く三つの乖離

一つめの乖離は、多様化する市民の余暇活動にともなう博物館へのニーズの減少である。その一つの表れが小中学校の夏休みの自由研究に見て取れる。かつては夏休み期間中に当館で自由研究の相談窓口を設置すると、数十人～百数十人がくる盛況ぶりであった。しかし、横須賀市では 90 年代後半から、それまで夏休みの必修の宿題であった「自由研究」を、ポスター・作文・標語などと並べて選択できるようにし、総合的な学習など授業時間内で調べ学習を扱い始めたことから、2000 年代以降は当館への相談が数件にまで減少した。以降、当館では夏休みの相談窓口を廃止しており、新しい学芸員たちにとって相談窓口の盛況は昔の話になってしまった。

二つめの乖離は、行政内部における博物館への期待の減少である。出先機関である博物館の学芸員にとっては、首長部局はもちろんのこと所管する教育委員会の職員でさえも交流が乏しくなりがちである。その中にあって専門分野や博物館資料の扱い方に詳しくなかった行政職員と、市職員なら当然の博物館リテラシーを持って臨むものと期待した学芸員の間で、しばしば大小のトラブルが発生したことにより連携が乏しくなっていった結果、新しい学芸員たちは市役所内部での博物館の認知度の低さに戸惑うこととなった。

三つめの乖離は、博物館を利用しない近隣住民からの失望の声である。これは後述する近隣商店街とのイベントの打合せにおいて、筆者が一人の年配の商店主から「博物館には商店街でも有名な国内外で活躍する学芸員の先生が何人もいらしたのに、何をしていたのか、商店街に何も伝わってこなかった。（同じ打合せの席に学芸員が参加したことは）嬉しいことだけど、遅かったよ」と言われたことである。長年すくい上げてこられなかった、地域からの期待の裏返しとしての失望感を、印象的に受け止めた瞬間であった。

4．新しい学芸員による「つながる」取組み

新しい「第三世代」の学芸員たちは、自然部門・人文部門の間の距離感や研究団体の高齢化などの「内なる課題」とともに、ニーズ・行政・地域との乖離という「外との課題」に取組むこととなった。これらの取組みには、博物館や研究団体にとって過去に否定されていた考え方や前例のない活動が含まれているため、新しい学芸員が採用当初に熱を持って取組んでも、未熟さゆえの不十分な提案と一蹴され、徐々に熱を失って自分の専門や担当分野にのみ注力していかざるを得ない状況であった。こうした状況で筆者が思い至ったのは、個々ではなく「つながり」で乗越えることであった。

2009 年、筆者は市役所内の職員研修制度を利用した自主研究グループ「新しい博物館を考える会」を設立し、新しい学芸員と市役所の若手職員の情報交換の場を設けた。若手職員は過去に博物館へ配属されたり、学芸員と同期入庁であったり、仕事で縁があったりした行政職員に声をかけた。活動は、ほぼ毎月一回、業務終了後の時間を利用して会合を開いたり、休日に他都市の社会教育施設を視察したりするもので、新しい博物館に関するアイディアを共有することが主であったが、互いの業務の悩みを相談するなどしていく中で、博物館を超えた市役所内のつながりが強まり、このつながりが広報や担当者の紹介など博物館の業務でも直接的な効果をもたらした（第 4 図）。

第 4 図　自主研究グループで商店街イベントの準備に参加（2017 年 7 月）

2011 年からは博物館実習の学生を自然部門と人文部門合同で指導し、2015 年には筆者が司会となりかつての「博物館ゼミナール」を復活[7]させた。前者は、8 人の学芸員が約 1 日ずつ担当するオムニバス形式の実習で、博物館の実情を知りたい学生にとって好評であり、2017 年にはこのカリキュラムを維持しながら学生に展示企画立案の課題を与え、自然班と人文班に分かれた学生が一つのテーマに対して別々の切り口による展示案に取組み、各部門の新しい学芸員が指導・展示制作をおこなった。後者は、毎月一回の館内会議の後に約一時間を設け、一人の学芸員もしくは職員が情報提供（調査出張報告、企画展プラン、現在取組んでいる活動など自由）を行い、質疑応答をするものである。互いの専門分野を知ることで、来館者対応で担当学芸員や関連分野の学芸員を紹介しやすくなることで博物館の総合力が高まるだけでなく、互いに「聞いてもらえた」実感が、学芸員の「異分野の壁」を超えてつながりを強める効果をもたらし、前出の博物館実習における学生の展示企画を形にする場面では、自然・人文双方で展示企画に意見を出し合い、協力して展示制作を行う流れが生まれた。

5．地域と「つながる」取組みへ

新しい学芸員が中心となって、博物館内のつながりと行政とつながりを醸成していく活動がさらに外部へと進展し、以下に述べる商店街イベントとのコラボレーションが実現した。これは博物館が隣接する横須賀市上町（うわまち）にある 4 商店街からなる上町商店街連合会のイベント実行委員会が主催する 3 つのイベント、桜まつり（4 月）と灯ろうまつり（7 月）とハロウィンフェスティバル（10 月）であり、2017 年は博物館が公式に共催もしくは協力として参画した年となった。

7）「博物館セミナー」という名称で、学芸員だけでなく運営・管理担当の職員や非常勤職員も参加（時には発表も）し、全館的な共有を行っている。

1）桜まつり

このイベントは博物館を取り囲むように立地している横須賀市中央公園を会場に東日本大震災の翌年（2012 年）から始まり、近年は 3 月最終日曜日と 4 月第 1 日曜日に開催され、2017 年は 3 月 26 日が雨のため 4 月 2 日のみの開催になった。公園中央部の広場に 20 を超える模擬店やワークショップが並び、来場者は商店街と合わせて延 8,000 人の人出（主催者発表）があった。博物館は共催団体[8]として広場の一角にワークショップスペースとしてテントを借り、「おでかけ博物館 in 桜まつり」を開催した。移動博物館セット（主に自然史系の標本セット。随時鑑賞可。第 5 図）、押し花・押し葉しおり制作コーナー（花や葉とともに絵を描いてパウチする。随時体験可）、地層のできかた実験ショー（細長い水槽で粒度の異なる砂を流して見せる。2 回実演）、昔の衣装の着替え体験（縄文時代の貫頭衣［かんとうい］や大正時代の消防服などの着替え体験。解説とともに 2 回）を実施した。さらに、ワークショップスペースと博物館前に、それぞれ館内の当日イベントや桜・花見に関する展示の案内板を設置した。

第 5 図　「おでかけ博物館 in 桜まつり」での移動博物館セットの様子（2017 年 4 月）

ワークショップスペースでの対応は、事前の会議で時間割を提案して当日出勤の学芸員が等しく当たれるように調整し、館内のつながりも演出するようにした。この日の博物館入館者数は約 1,100 人であるが、この時期の土日の例年の入館者数が 300 人前後、過去の桜まつり開催日の入館者数が 700 人前後であることから、商店街イベント参画の効果が数字の上でも示すことができた。

2）灯ろうまつり

このイベントは商店街を会場として 2008 年から開催されているイベントで、毎年盆に近い週末に実施されるが、2017 年は七夕と合わせて 7 月 7・8 日に開催された。商店街から、先の「おでかけ博物館」を商店街の一角の銭湯跡地で開催して欲しいとの提案を受け、博物館では協力という形で 7 月 7 日に「おでかけ博物館 in 当世館[9]」を開催した。移動博物館セット（脱衣所跡の棚を展示棚に見立てて自然史資料や民具を並べたもの。随時鑑賞可。第 6 図）、笹飾りづくりコーナー（脱衣所内に設置したテーブル

第 6 図　「おでかけ博物館 in 当世館」での移動博物館セットの様子（2017 年 7 月）

8）横須賀市の規則により当博物館が他の団体へ共催や後援を行う場合は、教育委員会名義となるので「共催 横須賀市教育委員会」として参画した。
9）とうせいかん。2007 年営業終了。以後はテナントやイベントスペースとして利用されていたが、浴室や脱衣所などの内装をほとんど営業当時のまま残している（2018 年 1 月現在）。

で手持ちサイズの笹の束に短冊や折り紙などを装飾して持ち帰れる。先着 50 名)、笹舟流しコーナー（浴室スペースに雨どいを組み合わせて設置し、作った笹舟を流して遊べる）を実施した。

会場では博物館でのイベントも広報し、博物館内には七夕に合わせた季節展示を制作した。商店街と博物館は離れているため、直接の博物館入館者増の効果は芳しくなかったものの、銭湯跡を博物館らしくアレンジした活動は、参加者のみならず市役所内に向けた PR でも「博物館が面白いことをやっている」との反響が得られた。この事業は、繁忙期のため人手をあまり工面できないことから博物館が「プロデュース」するという形で引き受けたので、博物館と同じく協力団体として参加している横須賀市文化会館と関東学院経営学部のゼミ生が、笹飾りづくりや笹舟流しで現地指導に当たっていただいたのだが、他の団体とのつながりも醸成する機会となった。

3）ハロウィンフェスティバル

ハロウィンフェスティバルは 2011 年から始まったイベントで、昼過ぎから 3 時間程度、仮装して商店街の協力店舗を訪ねた子供にお菓子を配るものであり、2017 年は 10 月 28 日に開催された。商店街からは予てより「ナイトミュージアムをやって欲しい」という希望があったため、博物館では一年前から調整を重ねてこのイベントに絡めた開催を進めた。ナイトミュージアムは初の試みであったため、教育委員会内での調整の結果、主催事業で展示解説ツアー形式を条件に開催へ漕ぎつけた。当日は日中のハロウィンフェスティバルに共催事業[10]として名を連ね、会場である商店街の一角でイベント実行委員会がナイトミュージアムの受付を設置、各回 30 余名で 3 グループ約 100 名分の受付名簿が受付開始 40 分で埋まった。博物館では 17 時の閉館後 1 時間半でナイトミュージアムのための会場設営（動線および立入禁止の表示、照明の調整、特設展示の設置）とボランティアスタッフ（イベント実行委員会、町内会有志、関東学院経営学部のゼミ生の計約 30 名）への指示出しを行い、館内常設展示 4 区画のうち 2 区画と特設展示を設置したロビースペースからなる 3 エリアに 1 人ずつ担当学芸員をつけ、遊撃的に見て回る学芸員および運営・管理担当職員ならびに各所に配置したボランティアスタッフによる安全管理のもと、18 時半から 20 分おきに 1 グループずつ迎え入れ、20 分で次のエリアへ送るリレー方式の展示解説ツアーとした（第 7 図）。ナイトミュージアムの入口（自然館エントランス）と出口（人文館エントランス）の外では、イベント実行委員会を中心としたボランティアスタッフによって、屋外プロジェクションや屋外カフェスペースを設置し、入館待ちや退館後の参加者のほか、事前申込に漏れた方々の思い出づ

第 7 図　ナイトミュージアムの様子
（2017 年 10 月）

10）注釈 8) に同じ。

くりの場を準備した（接近中の台風 22 号の影響により、お菓子販売スペースのみ実施）。商店街周辺の比較的狭い範囲に広報チラシを配布した当日から博物館に数件の問合せがあったり、商店街を通じてミニコミ誌などが事前取材に来たり、ナイトミュージアムの参加者アンケートでは 9 割以上が「満足した」「また参加したい」と回答したりしたことから、開催規模に比して反響が大きく、参加者の満足度が高かったと考えられる。

6．小さな「つながり」を大切に

前項でとり上げた三つの商店街イベントとのコラボレーションはいずれも 2017 年に初めて実現した事業であるが、ここへと至る流れが顕在化したのはその数年前に遡る。きっかけは 2014 年の桜まつりで、前出の自主研究グループに属する市役所の若手職員が、縁あって会場のメインステージの司会をボランティアで引き受けたことにあった。自主研究グループの仲間の舞台を盛り上るべく、新しい学芸員たちもまたボランティアで博物館展示のＰＲと現場の雰囲気を知るため、ある者は資料を片手に、ある者は資料を身につけて、会場を練り歩いたりステージショーの合間時間に舞台へ立ったりした。会場ではすぐに学芸員を取り囲む輪ができ、商店街のイベント実行委員会のメンバーにも声をかけられ、二年目（第 8 図）、三年目と続けていく中で、イベント実行委員会への参画を誘われるようになった。

さらに、自主研究グループが職務外の活動である特性を利用した活動として、夏の灯ろうまつりではグループで灯ろう出展参加費を捻出して博物館資料や特別展をデザインした灯ろうを出したり、イベント実行委員会から誘われて参加した当初の頃の会合では、自主研究グループとして非公式に商店街側の要望を聞きながら実現可能な連携イメージのすり合わせを行ったりした。

第 8 図　桜まつりにおける「練り歩き」（2015 年 4 月）

自主研究グループを通じた職務外の活動で得られた成果や実感や人との縁などを、博物館の職務上の公式な活動へスライドさせていくために利用したのが前出の「博物館ゼミナール」である。話題提供の一つとして桜まつりや灯ろうまつりの様子を伝えたことは、さらにその上のステップである館内会議での合意形成を図る上で有効であった。

新しい学芸員にとって、博物館全体を動かして前例のない地域連携を実施することは、頭の中で構想はできても、ベテラン学芸員や所属長を含む運営・管理担当職員たちと合意形成を図る上で多くの困難を伴うため、これまでは想いだけで終わってしまうことが多かった。自主研究グループや「博物館ゼミナール」等における「つながり」の実践は、職務外活動や過去の館

内活動の復活という、いずれも小さな取組みである。しかし、振返るとこのような取組みが地域イベントへの参画の糸口となっただけでなく、博物館内の合意形成を得やすくしたことにより、前項のコラボレーションにつながったのだと感じる。

当館では新しい学芸員を中心に、地域と市民に対しては当館の伝統的な二つの姿勢を守りつつ、新たに地域や市民と直接関わる機会を大切にしている。まだ一部の地域との小さな「つながり」ではあるが、そこにはこれまでの博物館における展示や講座、研究団体との関わりや、さらにはメーリングリストやＳＮＳなどでは得られない実感があることが分かった。こうした小さなつながりをこれからも大切にしていくことで、新しい地域博物館の活動を模索していきたい。[11)]

11）上町イベント実行委員会の田鹿和樹代表および高梨 治 元代表には、イベントに関する情報・資料を提供いただいた。自主研究グループ「新しい博物館を考える会」の八島裕子職員（横須賀市役所市民部）、遠藤雅弘主任（同健康部）、山本 薫学芸員、瀬川 渉学芸員には、自主研究グループの活動に関する情報・資料を提供いただいた。永嶋省吾博物館運営課長はじめ博物館運営課職員には、本稿執筆に際して理解・支援をいただいた。ここにお礼申し上げる。